

湘南慶育病院

症 例 概 要 【症例概要】

患者：60歳代 女性

病名：陳旧性左被殻出血

入院期間：2023年1月下旬～2023年3月下旬

【経過】

約7年前に左被殻出血にて右痙性片麻痺を呈し、回復期リハビリテーションを施行後、翌年より他院で外来リハビリテーションおよびボツリヌス治療を継続された。2022年に当院でボツリヌス療法治療実施し、カタカナの書字が書けるようになった。今回は、更なる改善を希望され再度2023年1月にボツリヌス療法治療を希望され入院となった。今回は、ひらがなでの書字と麻痺手で煎餅を食べてみたいという希望があったため、ボトックス施注後集中的なりハビリテーションを行った。その結果、ひらがなでの書字と7年ぶりに麻痺手で煎餅を食べることに成功した。

内 容

【症例紹介】

2016年11月初旬に発症の左被殻出血にて右痙性片麻痺を呈し他院（A）入院となる。2016年12月初旬より回復期リハビリテーションを施行後、2017年2月初旬より他院（B）で外来でのリハビリテーションおよびボツリヌス治療を含むリハビリテーションを継続された。その後、2022年に上肢機能に対する専門的なりハビリテーションを希望され、当院の地域包括ケア病棟へ入院となる。上下肢の重度の運動麻痺を呈しており、日常生活のセルフケアは自力で可能であるが、上肢は運動麻痺と痙縮により手を使う活動が難しい状態であった。開始当初は物品をつまみ・離すことが不可能であったが、医師の許可のもと、作業療法で神経筋電気刺激（NMES）や装具療法によって徐々に肘や手の随意運動が拡大し、物品のつまみ離しが連続してできるようになった。ご本人からは「発症して初めて物をつかんで離すことができうれしい」と感想が聞かれ、当初は1か月の入院を希望したが、治療効果を期待し、追加で1か月延長することとなった。その段階で、課題指向型訓練や自主トレの指導を導入し、麻痺した手を使用できるように促した。ご本人からは「（麻痺した右）手をまったく使っていなかったのも、正直何かができるようになるとはいままでは思えなかった。できれば字を書きたい」と訴えるようになった。訓練量確保のために、3Dプリンタでご本人用のトレーニング道具を提供して練習を進めたところ、最終的には書字（カタカナ）ができ、スプーンの練習ができるまでに回復した。

今回は、2023年1月に再度ボツリヌス療法後集中的なリハビリテーションを希望された。ご希望としては、麻痺手の更なる改善とひらがなを書きたいということ、麻痺手で煎餅を食べたいという強い希望があった。そのため、作業療法では上肢機能練習を行った。内容としては、電気刺激療法とロボット療法、KINVIS療法を実施した。介入中期より手指の分離が進み、物品を把持した後に筋を弛緩させることができるようになった。そのことによって細かな物品のピンチアンドリリースが可能となった。また、ロボット療法により肩や肘のコントロールの改善も認め手指の力を抜いた状態で書字することができるようになったことでペンの操作の改善を認めた。そのことは、ひらがなを書くことを可能にし、麻痺手で煎餅を食べることを可能にした。麻痺手で食物を食べることは7年ぶりであり、症例は「7年ぶりに右手で煎餅を食べることができた」と涙ぐむ様子が伺えた。最後に、今回2回目のボツリヌス治療であった。ご自宅や病棟で自主練習している様子も伺え、積極的にリハビリテーションに向き合う姿勢に感銘を受けた。私たちが慢性期で症状の改善が難しいと言われている患者さんに対して少しでも希望の叶えることのできるリハビリテーションを提供したい。